
尾裂狐と俺と陰陽師

某h

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尾裂狐と俺と陰陽師

【Nコード】

N8946Y

【作者名】

某h

【あらすじ】

阿部 弘樹は神社で一匹の狐と出会った……。

前回の学園を制し者より少しギャグおさえ目です。
名前の通り、尾裂狐（九尾）が出てきたり陰陽師が出てきたりと

何かと和な感じのバトル小説となります。

がんばって書きますので、もしよかったら最後まで読んでいただくと嬉しいです。

感想なんかいただけると歡喜してむせ返ってタヒってゾンビのごとく気持ち悪く生き返ります

巻（前書き）

前回の学園を制し者より少しギャグおさえ目です。

名前の通り、尾裂狐（九尾）が出てきたり陰陽師が出てきたりと何かと和な感じのバトル小説となります。

がんばって書きますので、もしよかったら最後まで読んでいただくと嬉しい。

感想なんかいただけると歓喜してむせ返ってタヒってゾンビのごとく気持ち悪く生き返ります

壺

皆さんは「尾裂狐^{おさき}」つと言うものをご存じだろうか？

キツネの姿をした妖怪^{あやかし}で尾が九本存在する。九尾の妖狐といったほうが一般的かも知れない。

厳密に言えば、尾裂狐^{おさき}というのは尾を数本持つキツネの総称であり九尾のキツネ＝尾先^{おさき}つという認識は間違っているのかもしれないが今はいいとしよう。

九尾、白面で金の毛並みと九本の尾、そして圧倒的な力を持つ大妖。万単位の年月を生きた古狐が化生したものだともいわれ、赤子のよな声で鳴き人を喰らう。

絶世の美女に化けるのも有名で、日本だけではなく世界各地で記録が残っている。中国で言う妲己^{だじき}、日本で言えば玉藻前^{たまものまえ}は知ってる人なら知っているかも知れない。

伝承や創作でも何かと悪しき霊的存在、憑き物として扱われることが多いが『事実上、すべての尾裂狐がそうと言うわけではない』つというのは、俺のバイトで先である骨董品屋のじいさんの受け売りだ。

このじいさんがやたらと伝説だの妖怪だのに詳しくて、俺がいま語っているうんちくはすべてそのじいさんから聞いた話だ。

まあ、でも、俺はこの尾裂狐という存在は所詮おとぎ話の中の存在であり小説や漫画、じいさんの話の中でしか存在しないものだと思っていた……。

「……………」

「ずずずッ！ うまい！」

しかし、現実はどうだろう。

目の前で、俺の晩飯である即席麺の赤いキツネうどんを景気のいい

音ですする少女は確かに尾が二本と頭から狐の耳が生えていた。

見た目中学生くらいの発育途中な体つき、貸してやった俺の大きめのパーカーがぶかぶかでワンピースのように彼女の体を隠している。流れるような神々しさを放つ金というよりは白に近い髪、黄金に輝く瞳、そしてまるで漫画やアニメで描かれる美しくもかわいらしい容姿は手にもたれた赤いカップ麺と顔に付いたうどんのネギによって台無しにされてしまっていた。

色気より食い気という言葉は、実は彼女のために作られた言葉ではなからうか。

「…………ぬ？」

彼女が俺の視線に気がついたようだ。

「どうしたのじゃ弘樹^{ひろき}？ そんなに見つめて…………もしかしてわしの『カップうどん』が欲しいのか？ ふむ、少しだけなら分けてやつてもいいぞ」

「いや、それ俺の晩飯だから、『お前の』カップうどんじゃないかな？」

という俺の抗議は彼女にはすでに聞こえておらず、自称九尾の少女はてかてかと光り輝く油揚げにご執心のようだ。

くれる気ねえじゃねえかという俺のツツコミは何の意味もなさないので口には出さない。

「はぐはぐはぐッ！」

黄金色の目をららんと輝かせ油揚げにむしゃぶりつく少女。

「うまいのお…………カップ麺とやは初めて食べるのじゃがお湯を入れるだけでこんなにうまいものができるとは…………。人間の進化も捨てたものではないの」

少女は耳と尻尾をパタパタとご機嫌に揺らす。

「さいですか…………」

俺の憂鬱なため息はうどんの湯気とともに六畳間の俺の部屋に消えていった。

そろそろうどんを食べ終わろうとせん彼女を眺めながら、どうして

こうなったのだろうかと俺はそんなことを思い出していた。

校舎の屋上は、今日は暖かった。

屋上に設置された青いベンチに腰をかけながら空を見上げる。空は青く澄み、綿菓子のような雲は自由に泳ぎ回っていた。

一通り空を眺めてから俺は視線を下す、山の中腹あたりに建てられたこの校舎の屋上からは自分の住む町が一望することができる。

この高校に入学して一年と少し、この人の寄り付かない穴場を見つけてちょうど一年ぐらいがたっただろうか、この景色も見慣れたものだ。

「……………」

俺はここでこうしてぼんやりしてるのが好きだった。まわりは静かで遠くからはかすかに思い思いの昼休みを楽しむ生徒たちの声がする。

ベンチが設置されてるのだから別に禁止されているわけではないのだろうが、この屋上には不思議と人が集まらない。というか全く来ない。

俺がここで新しい人に出会ったのは俺が最初にここに訪れた時の一回のみだ。

「……………ん？」

俺はふと足にもぞもぞとした違和感を感じ視線をさらに下に向ける。すると俺の足元で黒い毛の塊がうごめいていた。

「……………にああ」

「おお、みょうたらか」

俺は俺の足にすり寄ってきていた猫をベンチの上に乗せてやる。すると猫は俺の膝に飛び乗り毛づくろいを始めた。

こいつの名前はみょうたらこの屋上の数少ない住人の一匹、この屋

上に住み着く黒猫だ。

いったいなぜ校舎屋上に猫がいるのか、どこから迷い込んだのか、それはわからない。ただみようたらはずいぶん前からこの屋上にいるようで俺がここを見つけた時にはすでにここいた。

ここに人が集まらないのはこの猫にとってもよい方向に働き、教師やほかの生徒にはばれていないようだ。

「にゃあ」

一通り毛づくろいを終えたみようたらが何かを期待するように俺を見上げる。俺はこの猫が言わんとしていることをわかっていた。

「もうちよつと待ってる。もすぐ来るだろうから。今日の当番は俺じゃないんだよ」

「……にゃあ」

俺の言っていることを理解したのだろうか、お前はようなしだとでも言わんばかりにみようたらは俺の膝の上でまるまって居眠りを始めた。

この猫は時たまこうやってまるで人の言葉がわかるかのような行動をとる。まったく、不思議な猫だ。

「……………」

みようたらを見ていたら俺も眠たくなってきた。まだ、寒さが残る季節ではあるが太陽は朝方の布団のように暖かった。

（……さて、どうしたもんかな）

昼休みは短い、今寝てしまえば確実に次の授業までにおきることができないだろう。それは避けられないといけないのだが……。

（……次は美術だったか？ まあ、一時間ぐらいサボっても大丈夫かな）

最近の若者は精神が軟弱なのだ。

よし、寝よう！と俺がそんな情けない決心を固めて目を閉じた。

「……………」

それから数分、風が演奏する木々のざわめきを聞きながら俺がみよ
うたらと一緒にうとうとと船をこぎ始めた時だった。

「…………おきて」

突如、俺と太陽を遮る影が現れた。急に太陽の暖かさを失った俺は
布団を取り上げられたように身震いする。

「うう…………葵^{あおい}か？」

顔を確認するまでもなく俺は彼女の名前を呼んだ。この屋上に来る
人物は限られているからだ。

かすんだ目をこすり、視界をはっきりさせると時代錯誤で地味なセ
ーラー服を着た女子生徒が立っていた。

彼女の名前は土御門^{つちみかど} 葵^{あおい}俺とクラスは違うが俺と同じ二年生だ。

邪魔だからという理由だけで、ミディウムショートに切られた髪型。
その割に肩までかかるぐらい長いもみあげを、何やら高級そうな赤
いリボンの髪飾りでまとめている。

体の線が細く、身長は女子にしては平均ぐらいなのだろうか、そこ
らへんの基準はよくわからんが。

しかし、特筆すべきは彼女の持つ特殊な雰囲気だろう。威圧感とは
少し違うのかもしれないが彼女には誰も寄せ付けない、いや、近づ
いてはいけないようなそんな空気を放っている。

彼女自身もあまり他人にかかわろうとせず、整ったその綺麗な顔は
異常ほどに表情変化が少ない。一見何を考えているのかわからず、
つかみどころのない少女だ。

しかし、一年も彼女との付き合いがあればもう慣れてしまった。そ
れに彼女は少ないながらもしっかりと表情を持っており、最近では
その微妙な変化もわかるようになってきている。

たとえば今、葵はどこか卑下するような目で俺を見下していた。：

……………ってあれ？ として？

「……………」

「ど、どうしたんだ？」

何も言わず、視線だけで俺を非難する彼女に真意を訪ねる。なんと

いかすごく居心地が悪い。

たっぷりと10秒ほど間をあけてから、彼女はゆっくりと口を開いた。

「……午後の授業……サボるの？」

「ッ！ そ、そ、そんなわけないだろ？ な、なんで？」

「……今、寝てた」

「え？ あ、いや、そんなつもりは……」

葵には意外と真面目な一面がある。こうやって俺が授業をサボろうとしたり、ずばらをしようとするすぐに目から冷凍ビームを放つのだ。俺はこの目が苦手である。

以前、俺があまり成績がよろしくないという話をしたときなんて昼休みと放課後の時間を使って屋上で無理やり勉強をさせられたことがあった。

まあ、結果的に彼女の教え方は非常に分かりやすく、そのおかげで成績は幾分か伸びたわけだが。

授業をさぼったりなんかしたらまた強制勉強会に参加されられるかも知れない。そんなわけで、俺は必至で体裁を取り繕う。

別にサボろうとした証拠があるわけじゃないんだ、なんとかごまかせるかもしれない。

「これはだな、ちょっとうとうとしてただけであって……」

「……………」

「チャイムがなったらきちんと教室に戻るつもりだったし……」

「……………」

「……あ……うん……なんというかその……」

「……………」

「すみませんでした」

頼むから、そんな冷たい目で俺を見ないでくれ。彼女には全くかなう気がしなかった。

よく考えれば、俺も葵が来ることがわかっていたのになぜサボって居眠りしようなどと考えたのだろうか。

「なあご……」

俺を見上げるみょうたらは情けないとも言いたいのだろうか。うるせえよ畜生。

猫とにらみ合いをしていた俺だが、先にみょうたらの方が俺から興味が失せたようだ。みょうたらは俺の隣に座った鈴の膝の上に飛び移る。

葵はビニール袋を取り出していた。中には大量の煮干が入っているようだ。今日は彼女がみょうたらの食事当番なのだ。

「なんだ、結局お前は飯か……現金な奴だなあ……」

「……にああ」

なんとも言えと言いたいようにみょうたらは鈴の手から小ぶりな魚の煮干をくわえるとむしゃぶり始めた。

猫に相手にされない人間。なんかすごく屈辱だ。しかし、ここでこれ以上むきになるのも馬鹿らしい。

どうすることもできないモヤモヤ感をため息で吐き出してから、俺はしばらく鈴とみょうたらを静観していた。

みょうたらが煮干をたべきることに、一本、一本手渡しで餌をやる葵、なんというかすごく楽しそうだ。

いや、まあ例のごとくほぼ無表情ではあるのだが。しかしよく見ると、目と口元がほんの少しだけ緩んでいる。

そういえば、彼女と初めて会った日も彼女はこんな表情でみょうたらに餌をあげていた気がする。

（よく考えれば、もう一年も前の話なのか……）

あの時、俺はまだ葵のことをよく知らず、なぜそんなにおもしろく

なさそうなのかと思っていた。

「……………」

「……そろそろ」

「ん？」

ふと、鈴がみようたらを膝から下す。

「どうしたんだ？」

「……予鈴が鳴る」

彼女は屋上に設置された時計を指差す。確かに、あと少しで予鈴が鳴るだろう。

「じゃあ、もどるか……………」

葵は無言でうなずき立ちあがった。

葵に続いて俺も重い腰を上げる、本音を言つと授業終了までここにとどまっていたいがそれは葵が許してくれないだろう。

「じゃあな」

「にゃあ……………」

みようたらは少しさびしそうにそしてどこかつまらなそうに鳴いていた。

「おう、お帰り」

俺がクラスの席に戻ると、俺の前の席に座るイケメン眼鏡が俺を出迎えてくれた。

「金次郎か……………」

あまり交友の広くない俺を出迎えてくれる奴など決まり切っており、こいつはその数少ない友人の一人、仁部金次郎だ。
俺の小学生の時から竹馬の友である。

「どうでもいいが金次郎、出迎えの時ぐらい本から目を離したらど

うだ？」

「ちよつとまで、今いいところなんだ」

そう言つて、金次郎はさらにページをめくつた。そんな金次郎を横目に俺は自分の席に座る。

ふと、俺はいくつかの視線がこちらに向いているのに気がついた。

しかし、これは俺に向けられたものではないと俺は知っている。

この視線は金次郎に向けられた物、正確には金次郎に向けられた女子からのあこがれの視線だ。

逆に俺には『邪魔なんだよ』という殺気が向けられている……なんだよこの差は……。

いや、まあ単純にスペックの違いなんだろうけどね。

全国模試で常に上から10本の指には入り、運動神経抜群、おまけに、まさにアイドル顔負けというべき容姿なのだから世界は何かの間違つている。

しかし、金次郎はこのように非の打ちどころがない奴ではあるのだが、こいつにも一つだけ欠点がある。それは他人に対してあまり興味がないということだ。

俺のような昔からなじみのある奴とは普通に接してくれるのだが、全く興味がない奴に対しては反応すらしない。そのせいで泣いた女の子も数知れずいるようだ。

「ふう……すまなかつたな」

金次郎は本にしおりをはさんでたたむと机に置いた。中指で眼鏡のずれを直す姿は無駄にさわやかで殺意がわく。

なんというか、こいつからは常にイケメンオーラが出ていた。彼が本を読むさまは言うまでもなくイケメンで爆発してほしいし、運動をしている時もほとんど彼の独壇場で爆発してほしい、こないだなんてテストでオール満点を取りさらに女子からの注目度が上がっていた、ほんとに爆発して欲しい。

……はい、ひがみですがなにか？

「で、今日は何の本を読んでたんだ？」

俺はこれ以上俺の醜い心が露呈しないようにするため金次郎に話題を振ってみることにした。

「『で』っていうのはよくわからんが。犯罪心理学の本だ」

金次郎は高級感があふれるハードカバーの本を俺に手渡す。

本を受け取りずっしりとした感触を確かめた。本の側面には『犯罪心理学の全て』と題がうたれており、ページをパラパラとめくってみるとびっしりと圧縮された文字が俺の視界を埋め尽くしていた。

「なんというか……またすごい本をよんでるな。いつものことだが……」

「……？ 面白いぞ？ 興味があれば貸してやろうか？」

「いや、遠慮しとく」

こんな本を読み始めたら、のびたくんよりも早く眠りにつける自信がある。俺は本をさっさと金次郎に返した。

「そうか……」

この本の共感者でも欲しかったのだろうか、金次郎は少しだけ残念そうにしている。

それならもつとほかの奴とも関わればいいのに、そうすれば一人ぐらいはお前が読むような本の共感者が………現れるとは思えないが。

高校生で犯罪心理学の本読んでる奴なんかそうそう居ないだろ……。

「そういえば、優奈ゆながお前のこと探してたぞ」

金次郎は本を机の中に直すと次の美術の教科書を出しながらそんなことを言った。

「優奈が？」

優奈とは俺のもう一人の幼馴染の名前だ、クラスは違うが同じ学園に通っている。

「ああ、昼休みに来てな。なにか約束でもしてたのか？」

「いや……そんな記憶はないが……」

そういえば今日はまだ優奈に会っていない気がする。いつもなら朝うちのクラスに来て俺と金次郎と談笑しているのだが今日はいなか

った。

「メールでも打っておいた方がいいんじゃないか？」

「いや、いい。どうせ今日バイトだし後であうだろ」

それこそ、急ぎの用なら向こうからメールなり電話なりしてくるだろうしな。

「バイトって源じいさんのところか」

「ああ」

「ご苦労だな」

「それほどのもんじゃないよ。どうせあつこはほとんど客来ないし、源じいの話し相手になってやるのが主な仕事だからな」

「そうなのか……」

「お前はバイトとしないのか？」

「まあな、本を買う金が欲しいが……それで本が読む時間がなくなれば本末転倒だ。それに中央図書館に行けば大体の本は揃ってる」

「……本のことばっかだな」

「俺は本の虫だからな」

「自分で言うか……」

「まあ、ある程度自分のことは理解してるつもりだ」

金次郎は肩をすくめた。

「そんなことより、お前は準備しなくていいのか？」

「はあ？」

「いや、次の時間美術だぞ。移動教室だろ」

「あ！」

教室の時計を見ると後3分ほどで本鈴が鳴ろうとせん時間だった。

教室にはすでに誰もおらず、俺と金次郎が取り残されていた。

「待っててやるからさっさと準備しろ」

「お、おう！」

結局、俺たちはギリギリ本鈴が鳴り終わるまでに美術室に到着することができた。

美術の時間は退屈で、やっぱり屋上で昼寝していた方が有意義な気がした。

弐（前書き）

少し遅くなってしまいました。が第弐話です。

序盤であまり見どころも少ないですが読んで行ってくれると嬉しいです。

感想などいただけると昇天します。

式

おおのこつとつひんてん
大野骨董品店、町はずれにある古びた骨董品屋。今にも崩れてしま
いそうな外観の二階建ての一軒家である。

壁は茶色く濁りところどころひびが入っていて、正面に掛けられた
看板は錆つき赤いペンキで書かれた『大野骨董品店』の文字は雨風
にさらされ茶色に変色し少し禿げてしまっていた。

店主である源じいが30歳のころにこの店を始めたらしいので、か
れこれ47年ほどの歴史を誇る。もうそろそろ半世紀の年齢になろ
うとせん佇まいだ。

しかしながら中に入るとその内装は意外と小奇麗であった。

狭いながらも整理された商品。大小さまざまな坪はピカピカと輝き
自分を買ってくれと自己主張をしており、並べられた日本人形にも
特有の不気味さはなくその表情は柔らかい。

その他の骨董品にも手入れは行き届き、なんというか全体的にい明
るくあたたかいのだ。

まあ、結局外見のせいがこの店に客が入ってることなんてほとんど
なく、骨董品の手入れも俺が学校に行っている間に源じいが全てや
つてしまうので、この店のバイトである俺こと安部 弘樹あへ ひろきの業務と
言えば……。

「……王手」

「ああ！ ちょっと！ 待った！ 待っただ！」

「えー、まだですか？」

こうして店の奥で店主である大野 源おおの げん、通商、源じいの将棋の相手
をすることである。

「婿殿！ ちょっとは手加減せんか！」

「いやいや、手加減しろたいつも源じい怒るじゃないですか」

おんとし
御年77歳のくせにかすれた大声張り上げて本当に元気なじいさん
だ。

背筋もピンと伸びているし、分厚い老眼鏡の下の目はぎらぎらと輝いて生気を放っている。このじいさんは100歳過ぎてもピンピンしてそうだ。

「うるさい！　俺は婿殿の雇い主だぞ本気を出しながら俺に勝たせんか！」

「無茶苦茶言わないでください……」

そんなこんなでいつものように将棋は俺が優勢で試合が運んでいるのだが。

こんなことで経営が成り立つのかといえば……一応は成り立っているようだ。できれば俺はここにアルバイトとして雇われることはない。

たまに、それこそ1、2ヶ月に一回、高級そうな車に乗った『いかにも』な雰囲気を漂わせた客がやくる。

その客の手には大概、どてかいアタッシューケースがにぎられており源じいは客を奥の部屋に招き入れる。

数分立つて出てきたかと思うと、すでに客の手にアタッシューケースはなく坪やらの商品を持って帰るのだ。

怖いのでアタッシューケースの中身を聞いたことはない。

「にしたっておかしいだろ。俺だって弱くはない町内のジジイどもの中では最強といってもいいくらいだぞ」

「……そうなんですか」

と、言われたところで俺は町内の将棋のレベルなど知らないのどという反応をしているものか困るのだが。

「婿殿はこういう戦略ゲームになると『無駄』に強いな」

「無駄って言うな無駄って……」

確かに俺は戦略系のゲームは得意だった。小さい頃、よく親父に教えてもらってチェスだの将棋だの囲碁だのをしていた記憶がある。

自宅には碁盤、将棋盤、チェスボードなどがあり、今でもよく一人で詰将棋をしたりする。実はTVゲームなんかをするよりそっちの方が好きだった。

「金次郎とどちらが強いんじゃない？」

「将棋は137戦71勝ぐらいですかね。今のところ勝ち越してます」

「ほう、やるではないか」

「いや、単にあいつは教科書に忠実なんですよ。その分手が読みやすいです」

「それでもあの金次郎を負かすなんて大したものじゃよ」

「……………」

まあ、そう言われればそうなのかもしれない。今までたいして意識していなかったが。

俺が唯一あいつに張り合えることと言えばそれぐらいしかないかな……情けない話。

奴は昔からなんでもできたからなあ……。近くにいるとよく自分の無力さが思い知らされたもんだ。

「……………」

「……ふむ、まあ、気にすることはない」

「え？」

「金次郎はいろいろと特別だ。それにあやつと婿殿を比べるのは間違えだよ」

「な、何かですか？」

「どうせ、また自分は他人に劣っておるとか考えていたのだろう？」

「そんなことは……」

「ごまかさんでいい」

源じいはが駒を打つ音が俺の言葉を詰まらせる。源じいは老眼鏡の奥からぎらぎらとした目で俺を見据えた。

「結局、人は自分の目に見える世界でしか生きられないんだ。金次郎には金次郎の見える世界があり、婿殿には婿殿の見える世界がある。その世界が広いか狭いかで人間の価値が決まるわけじゃない」

「……………」

「お前がお前の世界を壊されそうになった時、お前の世界の住人を

傷つけられそうになった時、それを守ればお前は立派なヒーローだ。人間の価値なんぞそんなもんだよ」

この人にはなんとというか有無を言わさない威厳がある。現に俺も言葉が詰まってしまっていた。

「おつと、これ以上は説教臭くなってしまう。悪いな、年をとるとこうなるのがけない。ほれ、次はお前の番だぞ」

悪い悪いと湯のみでお茶をすすする源じい。

「あ……」

ぼんやりと源じいの話を聞いてしまっていた俺はあわてて次の手を考える。

「えつと……」

（やばいぞ、全く考えてなかった……）

軽いパニック状態に陥ってしまった俺は自分が優位に立っているの忘れて、鈍った頭を必死に回転させ始める。源じいの手は妙手でそれは俺をさらに混乱させた。

「くつくつくつ……どうした婿殿よ」

源じいは楽しそうに笑う。そんな時だった。

「ただいま！」

俺にとっては救世主ともいえるべきはつらつとした声が、店の入り口とは逆の裏口の方から飛んでくる。この声の主はたぶん優奈だ。よかった、どうやら彼女のおかげで一呼吸置くことができそうだ。リズムのいい足音からして優奈は自室のある二階には向かわずに直接店の方に出てきているのだろう。

「ちっ！ 邪魔が入ったか」

源じいはつまらなそうに湯のみのお茶を飲み干した。その数秒後、優奈が奥の部屋から顔を出す。

「おう、おかえ……」

「やっぱりいた！ 弘樹ッ！！」

と、俺の挨拶を遮ったこの無礼な少女は^{おおの}大野 ^{ゆな}優奈、金次郎と俺のもう一人の幼馴染だ。

パツチリとした瞳が特徴的で、髪型は左右の髪で二本づつ合計4本の三つ網を作り髪全体をポニーテールでまとめていた。

優奈はこの大野骨董品店に源じいと二人で住んでいる。

彼女の両親は彼女が物心つくころにはすでに他界していたからだ。

俺も優奈の両親の顔は写真でしか見た子どがない。

源じいの男手一つで育てられてきた優奈は、顔は結構可愛いのに発言や言動がボーイッシュで、悪く言えば女の子らしくなく良くいえば親しみやすい性格をしている。

セーラー服の紺のスカートを動きやすいようにと短く着こなし下にスパッツを着用しているのは彼女の活発さをよく表しているだろう。運動神経のいい優奈はいろいろな部活を掛け持ちしており、俺が知っているだけでテニス部、料理手芸部、ソフトボール部、バレー部とたくさんある。

そのため優奈がこんな早い時間に帰ってくるのは珍しいことで、俺はその訳を聞きたかったところなのだが……。

「ど、どうしたんだ？」

優奈は俺の肩を掴んで前後にぐわんぐわん揺らしていた。脳みそがシェイクされる。

「どうしたんだ？　じゃないよ！　どうして今日、僕が昼休み迎えに行った時にいなかったのさ！」

「は？　どうしてって……」

そういえば金次郎が何か言っていたな、優奈が探しているとか何とか……。

「なんだよ、何か用事でもあったのか？」

俺は優奈に尋ねる。俺としては約束などした記憶がなかったからだ。「昨日メールしたでしょ？」料理部でマフィンを作るんで、その味見をしてほしいから昼休み予定を空けておいて『って！』

「は？　いやそんなメールは着てなかったはず……」

俺は携帯を確認しようとポケットをまさぐる。

（……ん？　あれ？）

しかし、俺のポケットから出てきたのは一つの古びたお守りのみだった。これは昔母さんが俺にくれていつも身につけているものだ。そして、そのお守り以外俺のポケットに入っているものはない。俺の携帯はいつたいどこへ……。

「ああ！　そういや昨日充電が切れてそのまま充電機につなぎっぱなしだ……」

「なッ！」

優奈の一瞬表情が固まり、次の瞬間にはがっくしと力なく肩を落とした。

携帯をほとんどいいほど使わない俺はこうやって家に忘れてしまうことが結構あった。

それでも普段ならメールなんて来ないのでたいして影響はないが今回は少しタイミングが悪かったようだ。

「おうおうそれはなんというか、ご愁傷さまだな孫娘よ。あんなに朝早くから出掛けて行ったのにな」

「お、おじいちゃんは黙ってて！」

「くつくつくつ！」

なぜか顔を赤く染めた優奈を見て源じいはいやらしく笑っていた。しかし、なんといいか悪いことをしてしまった。普段からもう少し携帯を利用すべきだろうか。

いや、まあ、利用したくても特にメールしたりする相手もいないだけだね……。

「まあ、何はともあれ悪かったな」

俺は優奈に素直に謝った。

「もういいよ……はい、これ」

「ん？　もしかしてそれが……」

「うん、結構うまく焼けたから」

優奈からピンク色の包みを受け取る。その包みは頭はかわいらしい赤のリボンで縛られていた。

手のひらサイズのそれはほのかに甘い香りを漂わせている。

「そうか、ありがとう。じゃあ家で食べ……」

俺はもらったマフィンをかばんに直しておこうとして……。

「バツカモンー!!」

源じいがいきなり某魚介類一家の大黒柱のように俺を怒鳴りつけた。

「な、なんですかいきなり」

「婿殿は少しは そんな事だからクラスの女の子の中では陰で面白くない奴とか、影が薄いとか言われるんだぞ」

「え!? ちょっと待って! 初耳なんだけどそれ! てか、なんで源じいがそんなこと知ってるの!？」

「そんなことはどうでもいい」

「いやいや、俺にとっては結構重要なことですよ! 今後の俺の高校生活において!」

「なら少しは頭を使え! この頭は将棋をするためだけにあるんじゃないだろ?」

「って!」

源じいは人差指で俺の頭を小突いた。

「こういうときはなその場で食べてあげて、そのばでおいしいねって言うてあげるのが男ってもんだ」

「そ、そうなのか……?」

「まったく、婿殿は女心ってもんをわかってない」

「……………」

確かに俺は女心なんてものはよくわからないので言い返すことができない。

「優奈もその方がいいんだろ?」

「うん。まあ、今食べてもらって直接感想を言ってもらった方がうれしいね」

源じいの問いかけにうなづく優奈。目の前で優菜の瞳は期待するよに輝いていた。

「そうか……」

うん、まあよく考えれば今食べて感想を言った方が作った側として

もううれしいかもしれない。

そんなところに頭が回らないから俺はモテないのだろう。うん、そうだ！　そうに違いない。

決して顔がさえてないだとか、頭もたいして良くないだとか、身長も……これ以上はやめておこう。

「じゃあいただきます」

現実逃避もそこに俺は包みを開く。中には独特のカップの型にチョコマフィンが入っていた。

ココアでも使っているのだろうか、茶色いマフィンからチョコチップが頭を出しておりなんとも甘味なおいを漂わせている。

まあ、優奈は昔から大野家の料理や掃除、洗濯などを担当してきた分、家事スキルが高いくらい。なので味の心配はしていなかった。

俺は型を少し剥いでマフィンを一口食べる。

「……うん、うまい」

予想通り、優奈の作ったマフィンはうまかった。

見た目より甘さ控えめで生地がしっとりとしているチョコチップにはビターチョコを使っているのだろうか、俺の好みに合わせて作ってくれたんだろう。

「ほんと？　よかったよ！」

どこか安心したように息をつく優奈。

俺はマフィンで乾いた口を湯のみのお茶でうるおしてから言った。

「ありがとうな」

「いえいえ、こっちが味見してほしかっただけだからね」

そう言っただけで優奈は俺からいらなくなったピンクの包みを受け取り綺麗に折りたたんだ。こういうところは女の子だ。

俺はマフィンをもう一口頬張りながら将棋の駒を進めた。

あと2〜3手で源じいは詰むだろう。そんな状況に嫌気がさしたのか、それとも考える時間が欲しかったのか、源じいは新たに話題を切り出した。

「そんなことより孫娘よ。あの話はもうしたのか？」

「え……」

「あの話？」

源じいのセリフに首をかしげる俺。

「なんだ……その様子だとまだ話していなかったのか？」

「う、うるさいなあ！ 今日話そうと思ってたんだよ！」

「……？」

いったい何の話だろう。なぜか優奈が少しそわそわしているようにも見える。

少しためらうような間をおいてから優奈は話し始めた。

「弘樹は、先月隣の町に遊園地ができたの知ってる？」

「ああ、なんかチラシが入ってたな」

確か、観光地がないこの一帯に名物を作ろうと県と企業が協力して建設していたかなりでかいものだったはずだ。世界最大級の観覧車売りなのだとか。二年ほど前から建設が始まりつい先月の完成披露宴は二コースでも取り上げられていた。

確か、インパクトパークって名前だったような……。

「それでさ……僕、その遊園地の優待券もらったんだけど……それが最大5人まで入場できるんだよ……」

「へー、それはずいぶんとレアな物を手に入れたな」

インパクトパークは完成はしているがまだ一般開放はされておらず、今、入れるのは優待券を持った一部富裕層や抽選で選ばれたの幸運な人間だけ、一般公開は夏の始まりぐらいになるらしい。

実際に手に入れたのは俺だがなと源じいは次の手を打ちながらぼやいていた。

「うん……でさ……も、もしよかったら今度僕とその遊園地に……」

「おう！ いいぞ！」

「え？」

「遊園地いくんだろ？ 是非とも俺も連れてってくれ！」

「いいの！？」

「いいも何も……」

逆にこちらからお願いしたいぐらいだ。こう見えても俺はジェットコースターとかアトラクションが結構好きだったりする。

完成したばかりの遊園地のが無料、しかもほぼ待ち時間なしで体験できるなんてこんな機会めったにないだろう。

一般公開が始まってしまえば待ち時間だけで時間を取られてあまり遊園地を堪能でないだろうからな。

「でも久しぶりだな三人で遊園地なんて……」

「……え？ 三人？」

「ああ、金次郎も行くんだろ？ そういえば久しぶりだな三人で遊園地なんて行くの」

「あ、えつと……その……」

「……？ どうしたんだ？」

ももごと口ごもってしまふ優奈。いつもはつきりと意見を言う優奈にするとなかなか珍しい光景だ。

「金次郎は……あれだよ！ あいつ本読むので忙しいし……そうだよ！ そろそろ模試があつたでしょ？ 勉強とかして断られるんじゃないかな？」

「うーん……誘えば来ると思うけど」

「いいや、来ないね！ 絶対！」

「そ、そうか……？」

優奈のすごい剣幕に気押される俺。

確かに金次郎は騒がしいところは嫌いだし、模試とか近かつたら遊びの誘いも断られることもあるが。

（まあ、誘えば嫌とは言わないだろうし、無理に連れていくのもな……）

「じゃあ、二人で行くか。たまにはそういうのも悪くないな」

「そ、そうだね！ じゃあ、今週の週末なんかどうかな？ 僕その日は部活も何もないんだ！」

「週末か……ああ、俺も特に予定はなかった」

まあ、俺の休日の予定といえば、趣味のミリタリー系の雑誌を買い

に行くか。優奈か金次郎、それか両方が遊びに来る、または遊びに行くぐらいしかないが。

「じゃあ決まりだね！……やった」

妙にテンションが高い優奈。そんなに遊園地へ行きたかったのだろうが、俺に背中を向けて小さくにガッツポーズまでしている。

しかし、遊園地か……本当に久しぶりだ。最後に行ったのはいつだったかな。確か中学校ぐらいの時に姉さんと俺、金次郎、優奈で行ったつきりだったような気がする。

「……二人で……遊園地」

「孫娘よ……気持ちはわかるが一人でにやにやするのはさすがに気持ち悪いぞ……」

「にやッ！ にやにやなんかしてにやい！」

「落ち着け……」

源じいは飽きたため息をついている。

「……？」

思い出に浸っていたせいか、源じいと優奈が何か話していたようだがよく聞こえなかった。

「どうしたんだ？」

「な、なんでもないよ！ 僕、夕飯の買い出しに行ってくるね！」

「買い物って……これから行くのか？」

「うん、夕飯の材料の買い置きがなかったからね。買ってこなきゃ」

「なんで帰りに買ってこなかったんだよ？」

「そ、それは……」

「それは姫殿に早くマフィンを食べてほしかったから……」

「おじいちゃん……！」

「……はいはい、年寄りは黙るわい」

源じいは次の手を打った。

（え？ 王をそこに動かしたら……）

俺は先ほど源じいから奪った金を王の前に置いた。

「じゃあ、行ってくるね！」

そそくさと店の入口の方から出て行ってしまった優奈。おかしな奴。
「……あやつもそろそろ行動と起こさんといかん。いくら嬪殿が
金次郎に隠れて目立たんといっても、いずれ誰かは嬪殿の魅力に気
づくだろう……」

「は？ 何の話ですか？」

「と言っても、当人の嬪殿がこれではな……」

「……？」

「なんでもない。さて、続きをしよう」

源じいはごまかすように次の手を打とうとするが。

「いや、もう詰めましたよ？」

「なぬ！ 卑怯だぞ！ 王手といつとらんぞ嬪殿！」

「言いましたよ！ 源じいが聞いてなかったんじゃないですか！」

「ぐぬぬ……！ もう一戦！ もう一戦だ！」

源じいは悔しそくに齒をかみしめていた。まあ、いつものアルバイ
トの光景だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8946y/>

尾裂狐と俺と陰陽師

2011年12月5日22時45分発行